おおひとものがたり
「巨人物語」

青森県岩木村幡副のお話

昔々、赤倉山に巨人が住んでいるというううわさがありましたが、谷が深くて、誰も行ってみたものがありません。

岩木村幡副に小山重という鍛冶屋がありました。

ある日、早く仕事を終って寝ていますと、真夜中にドンドンとくぐり戸をたたくものがあります。弟子が出てみると、

「赤倉がら鉄の棒を注文ネ　あがれした。八日までネ　でがしてけ」

と言うのです。親方にききに行くと、これはただごとでないと思ったがことわりかねて、

「引受けます」

と返事をさせて、使を帰しました。

そして次の日から、注文の鉄の棒をつくり始めました。

長さが一間、重さが六十貫という鉄の棒を鍛えるのですから大へんです。それでも、弟子と七日がかりで作り上げました。

約束の八日の日には朝早く弟子三人にせおわせて、赤倉沢のお堂まで持たせてやりました。

三人は　山奥に入って行くと、茂みの中にお堂があったので、そこに坐って待っていました。

しかし日暮れになっても受取人が来ません。あたりが真暗になった頃、やっとノソリと一人の男が現れました。

「お前だち、よく届けでくれだナ、重くてあたべ。今甘エもの食へら」

と言って茂みに入りました。やがて又その男が姿を現わして、火をおこし、串にさして何か焼いていました。

背がおそろしく高く、顔にもすねにも、ひげがばらばら生えているようでした。男は三人に魚をたべさせました。

三人はその後しばらく眠っていました。

夜中に一人が眼をさますと、自分の側にチャリンと音がきこえました。朝になって気がつくと鉄の棒がなくなって、その場所にたくさんの鳥目(昔のお金)がありました。

三人がお堂の方をみると、山の茂みがふみつけられて、ふみつけ道ができ、お堂のなげしには、二尺もある大わらじがぶらんぶらんとさがっていました。

三人はびっくりして顔を見合わせました。

三人は鳥目には目もくれず、山道を走るようにして幡副に帰りました。

銀治屋では帰りを待っていました。親方は三人に、色々尋ねましたが何も答えません。ただ、

「あの鉄の棒は、たしかに大男ネ　わだして来た」

と言ます。

村の人々も、

「あれは、赤倉の巨人が注文した、鉄の棒でねべが」

と、うわさしました。

注・赤字のカッコ内の文は、声に出して読みません。

日本の民話7『津軽の民話』　未來社 1979年より